

2009年2月発行

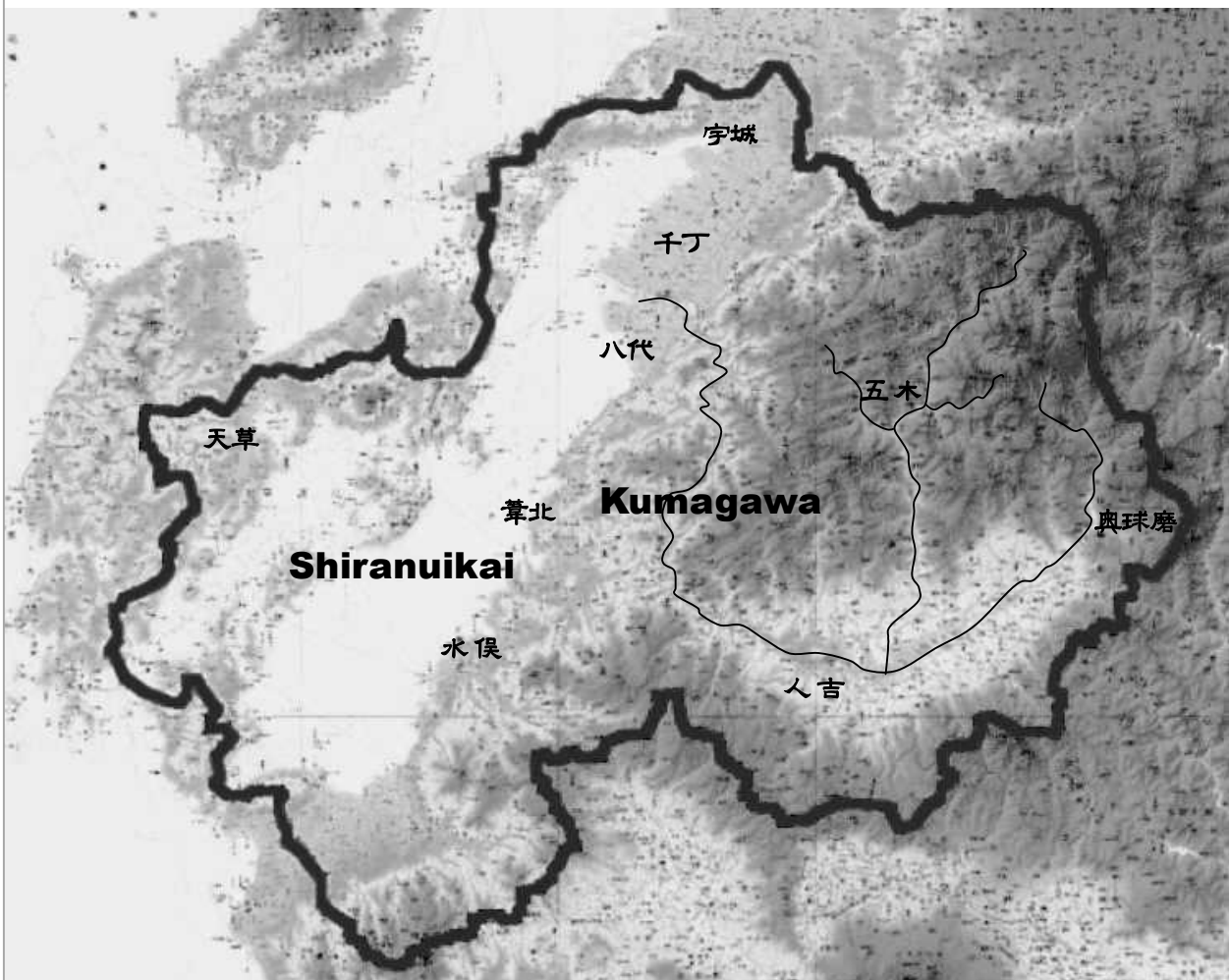
不知火海・球磨川流域圏学会ニューズレター

らぬいま

第5号

内容

- 平成20年度総会報告
- 現地見学会報告
- 未来に伝えたい球磨川河口の干潟
- BOOK紹介「川辺川ダムはいらない」
- 水俣の海をダイビングスポットに
- 天草下浦石工の調査報告書完成
- 田舎生活
- 平成21年度総会・研究発表会案内
- 会員紹介
- 学会誌原稿募集



TEL&FAX: **0964-26-2003**

事務局

熊本県下益城郡城南町東阿高 1136-6

平成 20 年度総会報告

日時：平成20年6月14日（土）午後12時

会場：宇城市不知火公民館 午後12時

◆平成19年度事業報告

- ①平成19年度総会開催 5月13日（日）水俣市総合もやいなおしセンター「もやい館」
- ②研究発表会 5月13日（日）水俣市総合もやいなおしセンター「もやい館」
- ③第1回現地見学会 5月12日（土）「観光うたせ船」乗船体験
- ④第2回現地見学会 10月14日（日）球磨村森林皆伐跡地見学
- ⑤ニューズレター発行 年2回（9月及び4月）
- ⑥学会誌発行 平成20年3月末日
- ⑦理事会開催 7回開催

◆平成19年度決算報告

（収入の部）

名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3000×84+10000×2	272,000	次年度分納入者含む(2名)
団体会費	10000円×4	40,000	
前年度繰越金		10,632	
雑収入	学会誌	71,000	
	PDF販売	35,000	
	発表会より残金	30,000	
	利息	365	
計		458,997	

（支出の部）

名 目	内 容	金 額	備 考
郵便代		38,964	会員他40名に発送
(内訳)	学会誌郵送	16,750	
(内訳)	ニューズレター郵送	15,564	
(内訳)	はがき	6,650	
学会誌作成費		252,000	300部
ニューズレター作成	2回	12,000	
総会発表会資料		7,925	
事務経費		5,930	コピー、印刷経費 封筒
HP維持費		10,000	
会場費	総会・研究発表会	7,150	
会場費	理事会	7,330	やつしろハーモニーホール
繰越金		117,698	
計		458,997	

監査 沢畑亨、伊勢戸明

◆平成20年度事業計画

- ①平成20年度総会開催 6月14日（土）宇城不知火公民館
- ②研究発表会 6月14日（土）宇城不知火公民館
- ③現地見学会1 6月15日（日）三角西港、松合の白壁土蔵見学
- ④現地見学会2 9月21日（日）御所浦全島博物館見学
- ⑤ニューズレター発行 年2回（9月及び3月）
- ⑥学会誌発行 平成20年3月末日
- ⑦理事会開催 4回／年
- ⑧ホームページの充実
- ⑨会員拡大 目標130名

◆平成 20 年度予算

(収入の部)

名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3000 円 × 108 名	324,000	
団体会費	10000 円 × 4	40,000	
繰越金		117,698	
雑収入		106,000	学会誌・PDF販売代金
計		587,698	

(支出の部)

名 目	内 容	金 額	備 考
郵便代			
学会誌作成費	$[(80 \times 4) + 50] \times (112 + 40)$	56,240	会員他 40 名に発送
ニューズレター作成		350,000	300 部
事務経費	2 回 / 年	20,000	
HP維持費		30,000	コピー、印刷経費
会場費		10,000	
予備費	総会・研究発表会	20,000	理事会会場費含
計		101,458	

◆平成 20 年度役員

《 理 事 》

会 長	大和田 紘一	熊本県立大学環境共生学部学部長・教授
副 会 長	原田 正純	熊本学園大学社会福祉学部福祉環境学科教授
〃	片野 學	東海大学農学部教授
事務局長	佐藤 伸二	崇城大学非常勤講師
会 計	坂井 米夫	イグサ農家
〃	東 慶治郎	環境保全型農業研究会会員
編 集 (委員長)	高木 正博	宮崎大学農学部准教授
〃 (委 員)	新井 祥穂	東京大学大学院総合文化研究科助教
〃 (委 員)	住吉 献太郎	熊本県文化財保護指導員
〃 (委 員)	蔵治 光一郎	東京大学愛知演習林講師
〃 (委 員)	村上 雅博	高知工科大学社会システム工学科教授
〃 (委 員)	井上 昭夫	熊本県立大学准教授
総 務 (委員長)	つる 詳子	環境カウンセラー/薬剤師
〃 (委 員)	上淵 徳光	白髪岳の自然を考える会元会長
〃 (委 員)	大塚 勝海	自営業
〃 (委 員)	小川 滋	福岡工業大学社会環境学部教授
〃 (委 員)	歌岡 宏信	NPO 法人水と緑いきものネットワークくまもと理事長
〃 (委 員)	田畑 清霧	八代高校教諭
〃 (委 員)	高野 茂樹	日本野鳥の会熊本県支部会長
〃 (委 員)	高橋 ユリカ	ルポライター
〃 (委 員)	吉川 勝秀	日本大学教授
〃 (委 員)	森山 聡之	崇城大学エコデザイン学科准教授
〃 (委 員)	安達 真由美	八代市環境課
〃 (委 員)	重松 貴子	ラフティングガイド
〃 (委 員)	久保田 貴紀	かちやあデザイン一級建築士事務所

《 監 事 》

監 事	伊勢戸 明	週刊ひとよし代表取締役
〃	沢畑 亨	水俣愛林館館長

《役員でない委員》(会則第 24 条 2 に規定)

総務	(委員) 松本 佳久	有機農園ケニアハウス
----	------------	------------

現地見学会報告——「三角西港、松合の白壁土蔵見学」報告

坂本久生

(愛知県立大学非常勤講師(仏文学、比較文学))

実は小生(実家は人吉)の父の実家は上天草の姫戸町で、しばらく前からは車で宇土半島を經由して天草へ行くことも多いのに、これまで三角西港に立ち寄ったことがなく、今回の現地見学会は三角西港ということで、この機会にぜひ見ておきたいと思って参加することにした。

前日(6月14日)の研究発表会では、「三角西港の文化・文学を考える会」会長の斉藤万芳氏が「世界遺産を目指す三角西港」と題して基調講演をされた。このときの話をもとに、三角西港について、あらましを確認しておきたい。

三角西港は、宮城県の野蒜港、福井県の三国港と並んで、明治三大築港の一つとされる。熊本に港をつくろうとする際、まず有明海に面した百貫石港が計画されたが、けっきょく三角に築くこととなった。明治17年に道路、港湾の工事が始まり、明治19年に道路が完成、明治20年開港式。特に三池炭鉱の石炭を輸送する拠点としての役割があり、近辺地域はもとより、大阪、東京への定期便、また遠く上海への便もあったという。やがて、鉄道(三角線)が敷かれたが、終点の駅(三角駅)は際崎港(三角の東港)の近くで、鉄道が三角港(旧三角港、三角西港)まで敷設されなかったことが痛手となった。石炭輸出は口之津港(長崎)に一本化され、また、際崎港(三角の東港)の改修が進むと、港の機能は徐々に三角西港から三角東港(現在の三角港)に移行。昭和に入って、旧三角港(三角西港)は役割を終えた。明治三大築港の他の二港は発展しつつ大きく変貌し、往年の面影はほとんどないのに対して、三角西港はかなり昔の姿をとどめている。現在、世界遺産への登録を目指している(産業遺産としてよりもむしろ文化遺産としての評価が高い)とのこと。



白壁となまこ壁の松合の町並

さて、6月15日の現地見学会のほうだが、あいにく小雨が降るなか、地元の方々のクルマ数台に分乗して、待ち合わせ場所の「宇城市不知火公民館」駐車場を出発した。途中、道の駅で小休止して、分乗の仕方を調整。参加者(計21名)には学会の会員だけでなく、思いがけないことに八代工専への留学生数名などもいることを知る。小生が同乗していた重松さんの車には、モンゴルからの留学生が乗りこみ、ことばや文化の違いなどについて話題になった。

しばらくして、松合に到着。小雨が続くなか、土蔵白壁の歴史的町並みを見学。佐藤先生より、



天草の下浦石工が関わったところについての説明も受ける。雨のため、町の奥までくわしく見るのを切り上げて出発。

海岸沿いをずっと西に進み、三角港、天草五橋への分岐路を過ぎ、宇土半島西端の三角西港に到着。車を降りると、洋風建築二棟（あとで「浦島屋」「龍驤館」とわかる）があり、広場、通路、街灯などの配置と合わせて、ヨーロッパ風の町並みという印象。海側へ歩き、石積埠頭、対岸、海（瀬戸）を見る。石積埠頭は手入れが行き届いた感じを受ける。

駐車場近くの西洋風建物は、元旅館の「浦島屋」で、現在は資料館になっている（ここで「三角西港散策マップ」をいただく）。三角西港について文書資料や写真などが展示され、ゆっくり見ていった。港湾を設計したオランダ人水利工師ムルドルは、街づくりにも携わり、随所に当時のヨーロッパの工法が見られるという。ただ、埠頭の建設にあたっては大勢の人が事故で亡くなっていて、当時の人々の労苦に思いを致す。なお、ここにはラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が立ち寄ったとのことで、ハーンの足跡についての展示もあった。やがて、研究発表会で基調講演をされた斉藤氏がおいでになり、喫茶室で、また説明をしていただいた。

外に出て、「三之橋」でも、水路に当時のヨーロッパの技術が用いられていることなど、具体的な説明をしていただき、興味深くうかがった。

設計者の名を冠した「ムルドルハウス」は、「物産館」（「おみやげ屋さん」）で、周辺地域の特産物のほか昔なつかしい品々も並んでいた。

この西北にある「旧高田回漕店」は、もともと回船問屋で、近年まで下宿屋として用いられていたという。2階の部屋を見て回っていると、窓をあけて海を見ていた田畑先生が、「スナメリが見えた」と言われ、ほかの人たちも注視するが、見えたり見えなかったり…。まだ小雨が残るなか、埠頭に急ぐグループがあり、ほかの人も続いて、しぜんにスナメリ・ウォッチングが始まった。対岸との中間あたりを見ていると、ときおり海面から黒い頭が出るのが見える。しばらくたつと、「見えない」と言っていた人も次々に「見えた」と言うようになり、それではそろそろ昼食をとということになった。

白い土蔵造りの「三角港築港記念館」は、もともと荷役倉庫とのことで、現在は改装されてレストラン（オランダ・カフェ）になっている。私たちは、そこのバルコニーで、三、四人ずつに分かれてテーブルについた。海を見ながら食事をして、田畑先生の説明を聞いていたが、途中でスナメリの出現する様子が変わってきた。あまり時間をおかず離れたところで頭を出すことからスナメリが複数いることがはっきりし、それも次第に数を増し、10匹をこえるほどのスナメリが次々と姿を見せることもあった。また、ただ頭を出すのではなく、体が見えるような少し激しい動きをするスナメリもいた。田畑先生の話では、「狩をしている」とのこと。そのスナメリが埠頭の近くまで寄ってきたので、小生は食事を中断し、カメラを手にして近くに行った。体が海面から出たところでシャッターを押したが、海面の渦と水中の灰色のスナメリの姿が写っていた。スナメリ・ウォッチングについては、夕方は姿を現わすことがあるが、他の時間帯では観察できない可能性もあるということだったので、めったにない機会に遭遇できて幸運であった。

昼食とスナメリ・ウォッチングのあと、埠頭で記念撮影をして、解散となった。

総じて、地域の歴史や文化の勉強になり、また、楽しい時間を過ごすことができた。

解散後は、また重松さんの車で小川先生とともに駅まで送っていただいた。このように、いろいろとお世話いただいた地元の方々に、深く感謝したい。



すぐ目の前に、可愛い姿を見せた

未来へ伝えたい球磨川河口の豊かな干潟

高野茂樹（八代野鳥愛好会会長）

潮がひいた干潟には、たくさんの穴があいています。干潟のあちらこちらには、穴に筆を差し込んでアナジャコを取っている人がいます。砂質の所では小さな砂団子が一面に散らばり、数え切れないほどのコメツキガニがはさみを上下に振り、泥質の所には無数のヤマトオサガニが甲羅干ししています。渚に近いところでは、シギ・チドリ類がしきりに嘴を動かしカニやゴカイなどの餌を漁っています。遠くでは、ハマグリかきで干潟の表面を搔く人の姿が陽炎に揺らいでいます。このように球磨川河口干潟では、人と鳥と干潟の生物たちがいっしょに生きています。

球磨川河口干潟は、九州山脈に端を発した球磨川が八代海に注ぐ河口域に発達した干潟です。八代海には約 4200 畝の干潟が残されており、球磨川河口周辺には 1000 畝を超す干潟が形成されています。昔から人々に親しまれていた干潟で、江戸時代後期の文書には蛤採りを楽しんでいる絵が残されており、自然を持続して利用する文化があったことが鮮やかに描かれています。

今も、干潟にはヤマトオサガニ、オサガニ、コメツキガニ、シオマネキ、ハクセンシオマネキなどのカニ類を始めニホンスナモグリ、アナジャコ、クルマエビなどの甲殻類、フトヘナタリ、シマヘナタリ、ゴマフダマなどの巻貝類、ハマグリ、アサリ、タイラギ、ハイガイなどの二枚貝類、ゴカイ類、そして生きた化石といわれるミドリシャミセンガイなどが生息し、約 250 種が記録されています。そして、それらを餌としている野鳥が一年を通して多数飛来し、その種類は 120 種にもなります。球磨川河口干潟には、日本有数の自然豊かな生態系が残されています。



特に、シギ・チドリ類にとって重要な飛来地となっており、春と秋にはシロチドリ、ハマシギ、キアシシギ、ソリハシシギ、アオアシシギ、チュウシャクシギなど約 40 種類が飛来し、シロチドリ、ダイゼン、ハマシギが越冬します。中でも、ソリハシシギ、キアシシギ、チュウシャクシギの 3 種類が東アジア・オーストラリア地域水鳥ネットワーク（シギ・チドリ類）の登録基準を越え、2004 年 8 月 1 日に登録が承認されました。また、冬には、セグロカモメ、ユリカモメなどのカモメ類が数千羽飛来し、オオズグロカモメとズグロカモメも見られます。オオズグロカモメは国内で定期的に飛来する唯一の場所であることは全国に知られ、遠くからたくさんの方が訪れます。ズグロカモメも希少種で百羽ほどが越冬します。近年は、6～10 羽のクロツラヘラサギが越冬し、干潮時には球磨川河口や前川河口の干潟で採餌する姿が見られます。クロツラヘラサギは世界で約 2000 羽しか生息しない大変貴重な水鳥です。カモ類はマガモ、オナガガモを中心に 5000 羽を超す数が越冬し、ここ数年は希少種のツクシガモが 200 羽程見られるようになりました。さらに、後背地の水田には数羽～10 数羽のマナヅルやナベヅルの飛来も見られます。さらに近年は、海域の生態系の食物連鎖の頂点にたつ種の一つであるミサゴの個体数も増えています。このよう

に、渡り性水鳥にとって越冬地、渡りの中継地として無くてはならない干潟になっています。

しかし、上流域におけるダム建設事業、荒瀬ダム撤去凍結をはじめ、八代海大築島周辺の埋立事業の進行、赤潮の発生など、自然の豊かさの維持が危惧されています。多くの人に球磨川河口や八代海の自然に関心を持っていただき、子どもたちに伝えて行ければと思います。「自然は未来の子どもたちからの借り物」ということを忘れずに、自然を持続的に利用する先人達の文化を忘れないようにしたいものです。球磨川河口に是非、おいで下さい。



本の紹介「川辺川ダムはいらない～『宝』を守る公共事業へ」

高橋ユリカさんが、岩波書店から新著

伊勢戸明（週刊ひとよし代表）

本会会員でルポライターの高橋ユリカさんの新著「川辺川ダムはいらない～『宝』を守る公共事業へ」が一月末、岩波書店から発刊された。高橋さんが十年余に亘って取材した川辺川ダムにかかわる経緯―東京、熊本、人吉球磨で展開されたためまぐるしい動きと人の姿―を詳述したルポルタージュで、川辺川ダムをめぐる「大河ドラマ」ともいべき渾身の大作。

「週刊ひとよし」に長期連載したルポに、蒲島熊本県知事主導のダム計画検討の有識者会議、昨年九月の同知事の劇的な「ダム計画白紙撤回」宣言など直近の動きと展開を加えて大幅に補筆修正し、四六判三百五十二頁にまとめている。

第一章「球磨川こそが守られるべき宝である」から第四章「見直すべきは国交省・農水省」までで、無駄な公共事業の多さとこれを地方に押しつける政財官、わけても中央官庁の強引な施策ぶりを弾劾した高橋さんは、「荒瀬ダム撤去凍結の課題が続き、大変に残念」としながらも「不知火海・球磨川流域圏が、独自の輝きを失わずにいることを祈る」と締めくくり、かけがえのない〈宝〉を未来に残す新しい課題を提起している。

新著の表紙写真は、高橋さんが十年前に初めて川辺川を訪れたときに咲き誇っていた菜の花と鮎漁の木舟で、夢のように美しいと感じたことが、その後十年の取材に繋がったという。新著の定価は税別三千円。

※直接のご注文は：岩波書店編集担当の山田まりさんまで（電話 03-5210-4231）



★ニュースレターの
原稿、随時募集中し
ています

学会では、1年に2回、ニュースレターを発行しています。地域の話題やお知らせ、個人の活動報告や提案などなんでも結構ですので、積極的にご投稿下さい。
送り先：FAX0965-32-7140、E-mail:tsuru-shoko89314@hiz.bbiiq.jp

水俣の海をダイビングスポットに 実際に潜った4月5月の水俣の海の様子（感想）

森下 誠（ダイビングインストラクター）

海中の水温は、15℃～20℃。ウエットスーツで潜るにはちょっと寒いので、ドライスーツ（服を着たまま体が濡れることなく潜ることができる）を着用して温かく快適に潜水。透明度は平均5～10m。良いときは15m以上の時もあり、水中に差し込む太陽の日差しがキラキラと輝きき、とてもキレイなのが印象的だった。潜ってすぐ目についたのは、ワカメ、アカモク、ホンダワラ類などの海藻が生い茂る光景。それらは見事な海藻の森を造り上げている。

その海藻の森の中層では、メバルやチャガラ（ハゼの仲間）の稚魚たち、そしてスズメダイの若魚が群れを作り元気に泳ぎまわっていた。

なかでも興味深かったのが、アオリイカの産卵行動。胴長20～30cmのアオリイカのペアの交接、ワカメやアカモクの茂みに産卵するメス、それを近くで見守るオス。目の前で繰り広げられる一連の様子は感動もの！気が付けば1時間以上も観察してしまうことも…。産卵中のメスに私が近づこうとするとオスが体色を黒っぽく変色させて威嚇してみせたり、逆に私の方へ興味を持ったのか？近づいてくる好奇心旺盛の個体もいた。

今の時期に海中で観察できるアオリイカの子供達は、この時に生みつけられた卵から孵化したのだろう。来年は、もっと大きくなって水俣の海に帰って来ることを期待したい。

また、海藻の森の海底では、育児嚢をパンパンに膨らましたタツノオトシゴのオスが何匹も観察できた。残念ながら赤ちゃんが生まれてくる瞬間は確認できなかったが、今後の楽しみに取っておこう。

春の水俣の海で元気に育った海藻は、多くの生き物達の産卵床になり、小さくてか弱い稚魚たちのゆりかごにもなっていた。



まだ一年を通して潜ったわけではないが、水俣の海にはダイバーを魅了する光景や生き物が豊富で、ダイビングポイントとしての素質（可能性）は十分に見込めると感じました。

これからも水俣の海をたくさんのダイバーに楽しんでいただけるよう、調査を続けて行きます。楽しみにお待ちしております。

※漁協（水俣漁業共同組合）の組合長をはじめ、組合員の皆さまに、ご協力いただき調査が出来ることに感謝いたします。



天草下浦石の調査報告書が完成しました

時松雅史（八代高専）

八代高専創立 30 周年記念事業である環不知火海文化交流基盤整備事業が一段落し、この度「天草石工の活動を通じた環不知火海の歴史と文化」と題した報告書が完成しました。

今回の報告書はこれまで本学会で報告した佐藤、時松、石原に加え、本校土木建築工学科の下田が「鳥居の三次元データの収集整理と特徴の分析」と題して下浦石工により製作された鳥居の形状分析を行っています。この分析により鳥居の形状の特徴を捉えることができました。

今回の事業により天草も含めて環不知火海沿岸地域にある神社の鳥居の全てを調査できたわけではありませんが鳥居についての大まかな全体像は捉えることができました。そして報告書を通じてもっと多くの方々にこれまであまり注目されていなかった下浦石工に関心を持っていただきたいと願っています。

報告書の内容は以下の通りです。

第 1 章下浦石工活動以前と活動範囲、第 2 章八代市・芦北町・水俣市の鳥居、第 3 章長島町の鳥居、第 4 章下浦石工が製作した金剛力士像、第 5 章鳥居の三次元データの収集整理と特徴の分析

※報告書に関するお問い合わせ＝八代高専一般科時松 0965-53-1243

田舎生活

東慶治郎（環境保全型農業研究会会員）

「命、短し 恋せよ乙女・・・」

ある有名な映画の一場面の歌の出だしである。意味は違うが、半世紀の歌の出だしである意味は違うが、半世紀をなんとなく生きてきて、もうやがて老いという世界に足を踏み入れようとする今、ちょっと心にしみる言葉である。ある人は、今は人生の黄金期だというのが、それも今まで生きてきた生き方によるのかなと改めて思う。

そんな感慨を抱きながら夜空を見上げると満天の星。人工の照明の無い深山でみる漆黒の空に、今にも降ってくるかもしれないと感じる程のダイヤモンドを散りばめたような満点の星ではないが、星々の移動、季節による星座の違いは十分過ぎる程、観察できる。

今、夜明け前には冬の星座があざやかだ。オリオンがあり、ぎょしゃ座、ふたご座などの星座たち。シリウスが怪しく輝く。

日が暮れ、暗くなり始めると秋の星座のさそり座、いて座が南の空にくっきりと顔を出していたのが、ひと寝をして目を開けると、この変化である。

この夜空の星々の動きを知ったのは、いつ頃だったろうか。中学生か小学校の高学年かと思うから、もうずいぶん前のことである。そして今もまったく変わらないように動いているように見える。実際はそうなのだが。

何故、そうなるのかは、少し知識を得て地球の自転や公転が原因であると知って、宇宙への意識をより深めたと言えるかな。意識を深めたとはいえ、星々の動きは五千年という時の経過を経ても何ひとつ変わらぬよう動いているのに、本人の変化はどうだろう。

そんな現実の中、星空はやはり美しい。いつ見ても美しい。そして、長い時間の変化と、はてしない空間の広がり想像させてくれる。昔、砂漠の民が、海で生きた民が、星空に物語を描いたような、そんなことが出来る田舎生活がしたいのだが。

2008 年 9 月 10 日



平成 21 年度総会・研究発表会・現地見学会のお知らせ

詳細は追って連絡いたしますが、ぜひ参加の検討をお願いします。また、現地見学会を希望される方は、早めにお知らせください。

日時：平成 **21** 年 **6** 月 **6** 日（土）**7** 日（日）

※会場が4月にならないと予約できないため、
場合によっては、13～14日に変更の場合もあります

会場：人吉市 中小企業大学校

6日

13:00 総会

14:30 研究発表会

基調講演「国宝に指定された青井阿蘇神社」

青井阿蘇神社第70代宮司 福川義文氏

研究発表会 6名（各20分）

19:00 交流会（同会場。宿泊もできます）

■研究発表者（ポスター発表を含む）を募集しています

※口頭発表は、お一人20分です。事前に配布資料のための要約（A4 1枚内）を提出していただきます。
※内容は不知火海・球磨川流域圏に関するものでなくても、流域関連の話題であれば何でも構いません。
※口頭発表の希望者が多い場合には、ポスター発表にまわっていただく場合もあります。
※申込先：電話/FAX0964-26-2003（佐藤）、E-mail:tsuru-shoko89314@niz.bbiq.jp（つる）

研究発表者
募集!

申込締切：3月末日

※詳しくは、左記参照下さい

7日

現地見学会 「肥薩線乗車体験と国宝・青井阿蘇神社見学」

《行程》

9:45 人吉駅集合

10:04 肥薩線乗車

11:40 吉松駅出発

13:00 人吉駅着

13:10 青井神社見学

14:40 解散

※昼食は車内で駅弁当を予定しています

■予約をお願いします！

予約をしないと座れないほどの人気ですので、参加を希望される方は、現段階での希望でいいのです。事務局までご一報下さい。予約がない場合は、立っての乗車になる場合があります。



肥薩線は、日本三大車窓の一つで、車窓からの眺めに加え、八代・人吉間の球磨川沿いの風景や国見山地を越える人吉・吉松間のスイッチバックとループ線、古くから残る駅舎などで近年大変な人気があります。



大同元年（806年）9月9日、阿蘇神社神主・尾方権之助大神惟基が、神託により阿蘇神社の祭神12柱のうち3柱の分霊を青井郷に祀ったのに始まると伝える。室町時代より、領主相良氏より篤い崇敬を受け、数度の社殿の造営・修造が行われた。現在の社殿は慶長15年～18年（1610年～1613年）の大造営のときのもので、桃山時代の特徴を示しており、国宝となっています。

★熊本駅から、人吉駅迄「人吉 SL」の利用もお勧めです

今年4月から熊本～人吉間をSL「人吉SL」が金・土・休日に運行されます。下りは熊本駅（9:41）→新八代駅（10:26）→人吉駅（12:13）ですから、SLで球磨川沿いに走りながらの人吉入りもお勧めです。片道2570円。

どんな学会ですか？ どんな人が会員ですか？

みなさんの要望にこたえ、数人の方に自己紹介していただきました。
さて、どんな学会像が見えてきますか？

●大和田紘一さん 熊本県立大学環境共生学部 学部長・教授

不知火海・球磨川流域圏学会の立ちあげから会長を命じられ、昨年6月で2期目に入りました。大学では、海環境保全の大事なことを教えながら、八代海の植物プランクトンや栄耀塩類の動態を調べ、また水産資源を取り戻すためにアマモ場やガラ藻場など、藻場の再生に取り組んでいます。

●森下 誠さん ダイビングインストラクター

1969年水俣市生まれ。子供のころの遊び場は、水俣川の河口から中流域、そして湯の児。いつも水中眼鏡、スノーケル、鉾、タモ、釣竿の何れかを携えて、毎日朝から晩まで飽きもせず生き物を探しまわっていました。

高校(水工)卒業後愛知県へ、海の専門学校を経て、名古屋のダイビング関係の会社に入社。入社後は、スクーバダイビングのインストラクターとして16年間勤務。昨年3月に退社。

4月から故郷水俣の海をダイビングスポットにすることと現地ダイビングサービスを立上げることを目標に海中を調査開始。現在は、海中の様子をブログにて紹介中。<http://minamata2008.at.webry.info/>。水俣の海で潜ってみたい方、ライセンスを取得したい方は、minamata-sea@kpa.biglobe.ne.jpまでお問い合わせください。

●山口 孚(まこと)さん エコロジスト・リーダー、「エコ村伝承館」代表

熊本県環境センターで実施している「動く環境教室」と同様、県内各地に環境学習の出前講座を実施しています、今年「くまもと環境賞」受賞しました。

生家は球磨川の上流で農業、林業、畜産業で米、麦、綿花、椎茸、木炭、家畜(牛、馬、豚、羊、山羊、兎、あひる、鶏)の繁殖、味噌・醤油作り、養蚕、すべて自給自足でした。今は球磨川河口に住み水質悪化を阻止できないか、自分に出来る事は何だろうと模索中です。

●高木正博さん 宮崎大学農学部 助教

みなさんこんにちは。流域圏外の者なのですが、研究テーマが(いわゆる)流域を対象としているので入会しました。専門は森林生態学です。授業では樹木の名前や植生調査の方法を教えたりしていますが、自身の最近の研究テーマは森林の持つ水質形成の働きや、雨に溶けて森林に降ってくる栄養分の森林の中で振る舞い、などについてです。今年度から2年間、学会誌の編集委員長を仰せつかっています。現在、第3巻の原稿を募集中です。詳しくは裏ページに掲載の原稿募集の案内をご覧ください。学会誌発行は、学会活動の一環として重要なものの一つと考えています。インターネットが発達した今でも、オーソライズされた紙媒体のメディアが持つ影響力は衰えていないと考えています。皆さんの気軽な投稿をお待ちしております。

★★★会員募集中です！★★★

市民と研究者が、様々な学問分野を“流域圏”という切り口でつなげ、地域のより深い理解につなげようとする、生まれたばかりの学会です。現在数十人の研究者及び市民の方が会員登録をしています。地域の知識を広く集め、研究者と市民をつなぐ学会活動に多くのご参加をお待ちしています。お仲間になって頂けそうな方がおられましたら、ご紹介ください。

連絡先(学会事務局): 熊本県下益城郡松橋城南町東阿高 1136-6 (佐藤伸二方) 年会費(個人) 3000円
TEL/FAX: 0964-26-2003 E-mail: tsuru-shoko89314@hiz.bbq.jp (つる方) (団体) 10000円
振込先: (郵便局) 口座記号番号 01720-5-63422 加入者 不知火海・球磨川流域圏学会
(銀行) ゆうちょ銀行 179店(当座) 063422 名義 不知火海・球磨川流域圏学会

不知火海・球磨川流域圏学会 学会誌 原稿募集！（随時）

—みなさんの、地域への熱い想い、愛着を学会誌に載せてみませんか—

学会では、会則に定められた学会誌を発行するため、下記の要領で原稿を募集いたします。専門家に限らず一般市民の方や農林水産業に従事されている方々、行政の方々から、学際的な情報を広く掲載し、紹介していきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

1. 原稿の種類

募集する原稿は、以下の4種類です。

1) 原著論文

広くみなさんから、論文を募集します。流域圏に少しでも関係するものであれば、どのような研究領域の論文でも構いません。ご投稿いただいた原稿は、専門家や地域の事情に詳しい方に査読を依頼し、編集委員会で採否を決定いたします。なお、本学会誌は高校生でも読めるものを目指していますので、専門用語には

必ずわかりやすい解説をつけてください。

2) 研究ノート、調査資料、記録

愛する地元＝流域圏に関して、資料を集めている方はいませんか？積み重ねた知識を文章に残しませんか？論文の形には至らなくても、あなたの探究心は流域のみなさんにとっても価値あることに違いありません。たとえば、自然・歴史・社会などの調査報告、観察記録、資料として未来に残したい情報などです。活発な探究心と知識の共有は、流域の未来の礎となることでしょう！小中学生、高校生からのクラブ活動や自由研究の紹介も大歓迎です。

3) 流域いろいろ

研究に限らず、流域への想い・エッセイ、イベント情報など、流域のみなさんに知ってほしいこと・お伝えしたいことはこちらにどうぞ。有形 無形の流域の宝物を探し出し、みなさんと分かち合いましょ！「こんな研究して欲しいなあ〜」という要望なども是非お寄せください。

4) コラム欄

分量は1ページから半ページの間（800～1600字）で、自己紹介、エッセイその他をお寄せください。図表写真は1枚だけ掲載可能です。ニューズレターに掲載するには字数が多すぎる、ニューズレターにすでに載ったが書き直して学会誌にも載せたい、というようなご希望も歓迎いたします。タイトル、著者名を明記してください。原稿の採否は編集委員会が決定します。

2. 発行予定 毎年3月31日。諸事情により変更される可能性があります。

3. 締切り 例年秋ごろ

4. 投稿方法

投稿を希望される方は、まず編集委員長に電話やメールでご相談ください。

原稿の形式は、学会誌創刊号に準じますが、引用文献の記載法など、細かい点については、追ってお知らせいたします。完成した原稿は、投稿整理票に必要な事項を記入の上、原稿とともにメールまたは郵送で編集委員長宛にお送りください。手書き原稿も歓迎します。

5. 送り先、問い合わせ先

編集委員長 高木正博 〒889-1702 宮崎市田野町乙11300 宮崎大学農学部附属田野フィールド（演習林） tel: 0985-86-0036, fax: 0985-86-2551、> e-mail: mtakagi@cc.miyazaki-u.ac.jp

不知火海・球磨川流域圏学会は、私たちでつくる、私たちのための学会です。皆さんからの熱い想いが投稿されることを、編集委員会委員一同、お待ちしております！（編集委員会）

—学会誌への広告募集中—

企業・商店・個人・サークルなど、分野を問いません。10cm×7cm（A4の1/8サイズ）5000円、（A4全面4万円）応募先は上記学会誌原稿の問合せ先まで。※公序良俗を乱し、学会誌の相応しくないと判断された場合はお断りする場合があります。

■不知火海・球磨川流域圏学会ニューズレター 第5号
編集：発行/不知火海・球磨川流域圏学会